

平成3年に『ホツマ神々の物語』の出版開始を始めました。直訳本の横行を防がんとするためです。『古事記』『日本書紀』と対比比較しましたら、記紀よりも古いことが明白になりました。(1972年にフシテ遭遇して199年)

わが国は、「縄文文明」建国の大文明なのです！

つまり、本居宣長も賀茂真淵も平田篤胤も見た事も無い、記紀の原書を、私達の手の中にすることが出来たのです。古事記の序文に言う「帝紀」「旧辞」の実物です。これを以って、本当の国学を定め直すことが出来ます。

『ホツマツタエ』はじめフシテ文献は、国家再建のいしずえです。

たとえば、考古学の発掘でフシテが発見されても、フシテ文献の何たるかの説明がどうしても必要です。発掘物だけで、フシテを基にする国学の構築はおそらく無理な事でしょう。フシテの文字が発掘されたとしても、ややもすれば、「直訳偽書の秀真伝(しゅうしんでん)」に流れてしまう事は、『ホツマツタエ』を媚中に弄ぶ人達のいつものようです。その時に起きるマスコミのバカ騒ぎが、わたくしの目の前に見えてくるように思えるからです。『魏志倭人伝』で読み解いてはひまの貶めに染めるだけです。『古事記』で読み解いても染めるだけです。そのために準備をしておこう。そうして取り組んできました。34年(2025・1991)が過ぎました。

その間、龍谷大学から溥泉さんの旧蔵書や草稿本の発見や、安曇川では和仁佑安聡写本の発見や、河口湖本庄家から『アワウタのアヤ』の発見や、宇和島の小笠原家の和仁佑安聡写本『フトマニ』の発見などが起こりました。

もうそろそろでしょうか？

準備は何とか間に合ってきたように思えます。

ホ2、 アメナナヨ トコミキのアヤ

『ホツマツタエ』の2アヤから、歴史についての説明が始まります。1アヤは、総論的な基調提示と言えるかと思います。ヲシテ時代中期、つまり、弥生時代の開き始め、7代アマカミのイサナギさまとイサナミさまの頃から、我が国の文化・文明は大きく再び花開きます。

みづるナビ

③ 『ホツマツタエ』3アヤ12のウタがとても重要なものだったのでした。『カクのミハタ』の『アワウタのアヤ』の発見にて明らかになりました。1アヤは総論の基調、2アヤはそれまでの歴史、3アヤが現在時点になるわけです。イサナギ・イサナミさまの国家再建が、特段に大きな出来事だったのです。オノコロの4段活用が18アヤに記されています。1, クコハニ（地球上に生物・人が住めるようになった） 2, クニトコタチの国家建国 3, イサナギ・イサナミさまの国家再建 4, 子供育て（子供が怖がるカミナリやカニの病に、オノコオノコと言ってなだめる）『ホツマツタエ』2アヤは、イサナギ・イサナミさまの時代以前から歴史を概略してまとめたものでした。

5・7調に綴る文章が正式文体として確立されます。5・7調の端緒になったのは、イサナギ・イサナミさまの「ツキウタ」でした。

アナニエヤ ウマシオトメに アイヌ ◎⊕丹き母 △母丹回中系丹 ○凡本
ワナニヤシ ウマシヲトコに アヒキ ◇⊕丹母丹 △母丹母丹回丹 ○凡本

「ツキウタ」とは、日と月の巡りの30日にも因み、幽のモノに物質が付いてくることにも因んでいます。

さらに、国語の文章の構文力の原理にも通じています。月の満ち欠けに、文章の構文のチカラ、幽体に物質が備わり編まれて行ゆくこと、さらには船が作られてきたイカダとカモフネの歴史をも含めての「○凡本 ◎凡本」の意味だったのでした。

話を建国当初に戻してご説明いたしましょう。初代のクニトコタチさまから、我が国は「中（ト）のヲシエ」を理念とした立憲君主国家として建国が為されていました。当時は、考古学に言う縄文時代の前期頃でしたから、経済基盤はそれほど大きく

ありませんでした。そこに、長い年月を経て、稲作の水田耕作の時代が訪れてきます。時代が急速に変貌を遂げる時代になって、7代アマカミのイサナギさまとイサナミさまの頃に社会にも大きな変革が醸されてまいりました。ひとつには、国語の再編が必要になりました。再編されて新しくなった国語の基礎の「アワウタ」の普及です。もうひとつは、水田稲作の普及です。畜力耕作の導入と、低湿地での新田開発です。この結果、「ツクウタ」が詠まれました。そして5・7調の文体が確立されました。さらに、多くのアヤ（文章・文献）が編集され始めました。我が国における、文化・文明の大発展がこの時代に起きたと申せます。

・

アメツチ（天地）の始まりの解き明かしを、アマテルカミが説明なさいました。この時は、ミコ（皇子）のオシホミミ（オシヒト）さんとタクハタ・チチヒメさんのトツギ（成婚）の儀式の直前のことでした。

チチヒメさんの父のタカギさん（7代タカミムスヒ）は、婚儀の際にミキ（サケ、お酒）が重要な役割を果たしていることに、その謂われを質問しました。

『トツギのミキには、特別な意味合いがあると聞いています。婚儀に際しまして大切なアヤをお教え下さいませんか？』

アマテルカミは、入り嫁の父のタカギさんに、「アメナナヨ（7代までの歴史）」と、「トコミキ（トツギを固める時のミキ）」の歴史を説明なさいました。

・

大宇宙のはじめの時の昔イナナのことです。アメ・ツチの初期のウヒトドロク状態トドロクのことでした。キワ（境い目、極まるの語源）の起きる兆しの未だに無い時です。

最初にアメミヲヤのイキが吹き放たれてキサシ(兆し)が起きました。分離して別れ初めたのはアウのメ(重い物)とヲ(軽い物)です。アウと言うのは、アフ(原初の気体)とウヒ(原初の液体や固体)の事でして、集まりグルグル回転する内に重い軽いの差に因って分離が起きます。ヲ(軽いもの)はアメ(天空)となりヒのワ(日)になります。メ(重いもの)はクニ(クニタマ、地球)となりツキ(月)となります。

カミ(カンヒト、祖先の人類)はその内に生まれました。やがて、人類は繁茂を遂げてゆき、アマカミの初代のクニトコタチの出現がおきました。クニトコタチはトコヨクニとして建国をします。「中(ト)のヲシエ」を国家建国の理念とする事から「中田由小井(トコヨクニ)」と命名されました。

みづるナビ

③ 「トコヨクニ」に漢字直訳の「常世」はいけません。「トコヨクニ」は、最も早い時期のわが国の国号です。「常世国」に漢字当てをすると、「あの世のクニ(死後の世界?)」になってしまいます。大間違いの China 風の貶め当てになるのです。現代辞書でもそうです、パソコンの変換での「当てモノ文章」を作ると、無茶苦茶になると言う、典型的な見本です。「直訳偽書の秀真伝(しゅうしんでん)」はこうして作られます。知ってか、知らずにか、大安売りの売国をしているわけです。

わたくしは早くに、この「直訳偽書の秀真伝(しゅうしんでん)」の悪い悪習悪癖に気が付きました。当時悪さを振るっていたのは、吾郷清人さん、鳥居礼でした。ヲシエに遭遇して19年、悪癖打倒を目指して活動を開始しました。それから34年、世に知らしめるために努力を積み重ねてきました。なのに、幾人も「直訳偽書の秀真伝(しゅうしんでん)」の人達は、ハタレみたいにゾロゾロ出てくるのでした。ハタレみたいに6群が出尽くさないと、終結には至らないのかも知れません。わたくしの努力が足りなかったのは事実ですね。まだまだまだまだです。

さらに、国家は発展してゆきます。遠方の地域からも指導を求められます。そこで、8地域に次代を担う指導者が派遣されました。ヤモ・ヤクタリのミ(ト)と言います。それぞれ、ト・ホ・カ・ミ・エ・ヒ・タ・メのカミ(指導者)はそのクニ(地域)を治めました。ここに、クニキミの始まりが起きました。サキリのミチ(夏の豊かなエネルギー)を、重んじてサツチ(夏の繁栄を尊ぶ)に治めたのでした。2代目のクニサツチの時代でした。それぞれに、オタリ【5人か? 詳細は未詳】のミ(ト)を生むのでした。

次代は、3代目のトコクンヌの時になります。ヤモ(8地域)のトコクンヌは、キミ

の補佐にトミを設けます。キミとトミとタミの三階層の役割分担の時代になります。トヨクンヌには120のミコがあった【詳細は未詳】と言われています。

アメナルミチによる建国からの3代の間には、女性がマツリコト（政治）に関わること無く治まっていました。この、3代の間は長い長い時代でした。おそらくは、世襲制の複数の世代にわたるアマカミであったと推定されます。

みづるナビ

③ 『ホツマツタエ』23アヤ13に「ミソムメノ トノカミキマス（36代後の意味か?）」、『ハニマツリのアヤ』に「ミナカヌシ フソヨニウメル タミクサノ（20024代後の意味か?）」（ミ8・20、45016）

マサカキ（1本60000年と公称する「ヨミの樹」を植え継いで500本にも及んだ頃、ミモ・ハカリ（3000万年）となります。モ・ハカリが1000万年（マサカキ・「ヨミ」での計数年）で、とても長い年月という意味で記されているようです。モ・ハカリやミモ・ハカリは、大まかな長年として理解すると適切なようです。

4代目のアマカミは、^{（男性）}フカミのウヒチニでした。この時代に社会の構造に変革もたらされます。時代の要請として、女性の社会的な役割が求められてきます。ウヒチニは、ウヒチニを正室に定めます。ここに、婚姻の制度が起きました。サヒアヒ（サヒアヒ）とも呼ばれる婚姻制度は、広くタミにも広まってゆきます。

サヒアヒ（サイアヒ）【詳細は未詳】の婚姻の制度のその元オリは、ウヒチニのヒナルノタケ（福井県越前市中平吹町、日野神社、日野山）のカンミヤにモモ（日本固有種のもも）のミ（木の実）をお持ちになって^{みくろじ}皇位に即かれました。モモ（日本固有種のもも）のミ（木の実）は、ヒナルのタケのカンミヤ（福井県越前市中平吹町、日野神社、日野山）の庭に植えられました所、3年の後にハナ（花）もミ（実）もモモ（百ほどにも多く）に咲き、実も成りゆくようです。それで、モモ（生じて固まる）のハナと名付けられました。ウヒチニとスヒチニのフタカミの事を、モモヒナギとモモヒナミとお呼びすることになったの

は、モモの花と実に由来します。「ヒナ」の言葉が付きました意味は、ヒトに成るマ
エ（以前）で、男女のペアになって初めて一人前と言う意味です。ハナもミ（実）もソ
（揃う所）の木の実の由来によって、ヲカミは「キ」、メカミは「ミ」と名が付きまし
た。揃ってペアになったヒトとして表明する婚姻の儀式は、ヤヨビ（旧3月）ミカ（3
日）に、ミキ（お酒）を醸し作って奉るのでした。モモのハナ（花）の許に、白酒のミキ
を酌みますと、細い三日月ほどのツキ（月）が器に映りました。細いお月さまを浮か
べてミキ（お酒）を勧めます。メカミが先ずお飲みになりました、後にヲカミです。
「ミ・キ（実を結ぶ・女性、春の兆し・男性）」のお酒の名称の通りです。ミ・キを飲んで男
女が交わります。ト「のミキです、」トのヲシテ「の精神で絆を固める」ミ・キ（実を
結ぶ・女性、春の兆し・男性）」のお酒です。「ミ（生じてくる）」の夫婦としての意識が篤く備
わって、正月の3日アサ（朝）には、サムカワ【詳細は未詳】で浴びられます。河で
のミソギです。ソテ（袖）の濡れ方に大小の違いがありました。ヲカミは大きくヒチテ、
メカミは少ないヒチでした。それは、ヲカミがメカミを庇って水浴びをしたからでし
た。「ニ（二のこころ）」のお気持ち
です。「ウ（大きい）」と「ス（少ない）」の「ニ（二のこころ）」の、仕草に現れた尊いこと
だと、ウヒチニさん、スヒチニさんと呼ぶようになります。ウヒとは、また、クニタ
マ（地球）の形作られる以前の「ウヒ（原初のドロドロ状態）」も意識した命名です。「ウヒ」
が煮上がって、固体・液体と、気体の分離が進み「クニタマ（地球）」に形成されまし
た。

多い少ないの、「ウ・ス」のフルコト（故事）から、ヒナのヒナカタ（雛形）が作られ
ます。ヲ（男性）はウオソテ（大袖）とハカマ（袴）の姿です。メ（女性）はコソテ（小袖）

と上に被るカツキ（被衣）です。ヒナカタの形が示されたので、広く国民にも結婚の制度が広まります。先ずは、ヤソ（80）のトミ（臣）たちが婚姻をおこないまして、タミ（一般国民）もツマを定めました。

ウヒの、クニタマ（地球）の形作られる以前の「ウヒ（原初のドロドロ状態）」が煮上がって、固体・液体と、気体の分離が進み「クニタマ（地球）」に形成され、そこから人類の発生が起きたわけです。アメ（天体）の形成からの歴史を踏まえたミチの結婚の制度は「アメルミチ」とも言えるわけです。これよりタクイ（家族、血族）も生じます。この時から500本のアマのマサカキ（500×6万年＝3000万年）が植え継がれました。（マサカキの「ヨミ」に依る計数年で長い年月の経過と理解されます）

次の時代は5代目オオトノチ、オオトマエに移ります。ツノクヰとイククイのアカミ（古代の天皇陛下）でして、ツノクヰはオオトノ（大きな宮殿）に於いて、イククイをツマに迎えます。「ト」前に会ってツマと為したことから、「♂（ウ・男性）はトノの別名が付きます。「𠂔（メ、女性）」はマエの別名で呼ばれます。ヤモツツキ【詳細は未詳、八方の地方にも波及か？ 800本のマサカキの植え継ぎの意か？】

6代目アマカミは、オモタルのカミです。カシコネさんとヤモ（八方）を巡ってタミ（一般国民）をタシ（「ト」のラシテ」の精神で恵み治める）ます。タサ、タシ、タス、タセと言う意味は、良い知恵を以ってプラスしてより良い方向に相乗効果を上げてゆくやり方です。（漢字の「治」に含まれる意味とは、大きな違いがあります）

オモタルさん、カシコネさんは、ヲウミ・アツミ（琵琶湖西岸の安曇川平野）の中心地のナカハシラから、全国各地を巡ります。ヒカシ（東）はヤマト（東海道諸国）やヒタカミ（東北地方）、ニシ（西）はツクスミ（九州）やアシハラ（中国地方）、ミナミ（南）はアフ（四国地方）やソサ（紀伊半島地方）、キタ（北）はネ（北陸道地方）やホソホコ・チタルクニ

（山陰道地方・出雲方面）までも巡り教え導きをなされました。モヨホ（100万年、マサカキの「ヨミ」での計年数）の長い年月を経ても、お世継ぎに恵まれませんでした。気候の変化もあって、治世のミチは衰えて世の中に混乱が生じてきました。ワイタメアラス【詳細は未詳、秩序の混乱を意味する】の状態に陥^{おち}ったのでした。

国家の再建を託すべき次代のアマカミには、イサナギとイサナミが選ばれます。イサナギはネのクニの名君のアワナギさんの継ぎ子でした。イサナミはヒタカミの名君のトヨケカミの娘さんです。イサナギ、イサナミのカップルをフタカミとして7代アマカミの重責を担ってもらうことに成りました。

皇位を譲られる際に、オモタルさんは、フタカミにミコトノリなさいます。

『これからのツホ（壺、要所）はアシハラ（低湿地の芦の原）の開発に懸^かかっていると考えられます。直接に治めている現状の1500の村落をあなた方に委ねます。また、統治の理念の象徴として、「トのラシテ」と「ホコ（サカホコ、後のツルギ）」も授けます』立憲君主国家の構造をしっかりと伝授するミコトノリを受けます。フタカミはウキハシ（皇位を受け継ぐ橋渡し、仲人）を得て7代目アマカミの位に即位なさいました。

ホコの治安維持の影響力を以って、社会に安定が齎^{あづか}されオノコロ（自ずからに定まり安定する）の状態が得られるのでした。その、道のりは、ミヤトノ（中心の宮殿）を建てて国家の再建を果たし、国号をオオヤマトと称することに始まります。各地域のクニの定め直しをおこないます。さらに、言葉のミチを定め直し、耕作技術の革新を図るなど、ヨロモノを生み出したのでした。ヒトクサ（一般国民）のミケ（食料）もコ・カヒ（養蚕技術、服飾の技術）のミチも教え広めて、人々はオノコロ（自ずからに定まり安定する）を得る事が出来たのでした。ここに、ワイタメアラス【詳細は未詳、秩序の混乱を意味する】の

状態から抜け出して秩序を構築した功績のイサオシと言われます。

さて、アメノカミのヨ（世）の7代目を、皇統からは遠かったフタカミが継ぐ事になった経緯を振り返ってみます。糸口はトコヨカミ（初代クニトコタチ）がマサカキの木の実をヒカシ（東）の土地に植えてハコクニのカミを任命なされた事に始まります。

ハコクニは、地震・津波で荒廃した国土を立て直す意味の「ハ・コ（地面・クニ、通るように固める）」、復興のクニの言葉が近いわけです。ヒタカミのタカマ（中心のミヤ）にもミナカヌシ（人類の祖先）を祭りました。タチハナ（カク、日本固有種のミカン）を植えて、ヒタカミのキミはタカミムスビとして讃えられて代々受け継がれてゆきます。キのトコタチとも讃えられます。キとは東の意味でもあり、マサカキ（コヨミの樹）も、タチハナ（カク、日本固有種のミカン）も特別に別けて植えた尊いクニの意味でもあるのです。

その、ミコにアメカカミカミが出ます。カカミカミは、ツクシ（九州、西のクニなのでカカミ、鏡ではありませんね）をタシ（教え治める）しました。カカミカミは偉くて、4代目アマカミのウヒチニさんも教えを受けたほどです。具体的にはマサカキの樹を分与して貰ったと推察されます。

カカミカミのミコにアメヨロツカミが出ます。ヨロツカミはソアサ（四国）をタシ（教え治める）しました。ヨロツカミは、アワナギとサクナギのミコを儲けます。アワナギはネのシラヤマを中心に、チタル（出雲地方）までノリ（法、掟）も通って治めたのでした。そこで産まれたのがタカヒト（のちのイサナギ）でした。タカヒトは立派なヒトとなりにカミロギと尊称されます。

イサナミさんの出自は、タカミムスビの家からでした。イミナ（こ本名）はイサコさ

までした。タカミムスビの5代目のカミのタマキネ（トヨケカミ・トヨウケ）さんの娘さんです。イサコヒメが後にイサナミさんと呼ばれます。

タカヒト（イサナギ）さんと、イサコヒメ（イサナミ）さんとの婚儀は、ウキハシ（大いなる仲人）をハヤタマノヲ（速玉大社、和歌山県新宮市新宮、に由来ありか？）が務めました。しかし、新婚のご両人が打ち解けるまで、上手くゆきませんでした。そこをコトサカノヲが解き結びました。ヒタカミのツサ（西南）のツクハ（筑波山）のイサミヤにてミヤを持たれて、イサナギさんとイサナミさんと名乗られました。

このフタカミの交わる時もト「ミキのお酒が用いられました。ト「ミキの「ト」「とは、「トのヲシテ」の「ト」と、「ホ」の「」で「オノコロ」の「」にも掛かって意味しています。国家の安定を実現する為にも「子」を求むるのです。

そもそもササケ（お酒）の名前の由来は、ト「ヨ（琵琶湖湖岸地方）の井ノクチ「多くの候補地があり、詳細は未詳」のスクナミカミ（後のスヒチニさん）の所にあった竹株にススメ（雀）がモミ（粳）を入れているのを見て、お酒に醗酵するのを発見したのでした。タケ（竹）の別名のササから、ササケと命名されました。ミキを醸して奉ったので、モヒナギ（4代アマカミ）さんからササナミと言う名前を賜ったのです。ササナミさんはササケヤマ（沙沙貴神社、滋賀県近江八幡市安土町常楽寺、佐々木山、あるいは日置神社、滋賀県高島市今津町酒波などに由来ありか？）に当時居たのでした。

コ「コノクミ（固めの杯）の謂われは、ヤヨイ・ミカ（3月3日）に結婚の儀式を初めて執りおこなった故事に因^{ちな}んでいました。サカツキ（酒に細い月、杯）の名称を生んだ4代目のアマカミの名のモモヒナギを尊んで、その山をヒナガタケ（ヒナルノタケ・日野山、日永嶽、福井県越前市と南条郡南越前町）と讀えるのです。